

## 退任の挨拶



鶴窓会前会長

齋藤 博行

(昭和45年農学部卒)

平成17年から副会長を14年務め、令和元年5月に第10代会長として就任しましたが、翌令和2年は新型コロナウイルスの蔓延で学校、大学閉鎖、在宅勤務等で世界中が大混乱し、人が集まる会合・会議、催し物は全て中止になり、各支部・総会も例外ではありませんでした。

鶴窓会会長および副会長として務めました16年間は、多くの会員の理解と支援を賜りました。鶴窓会各支部の会員の皆様との心温まる交流や代議員、役員の方々からは鶴窓会の活動方針、運営につきましてご示唆を頂き心からお礼申し上げます。

鶴窓会との関わりは、私が酒

田農業改良普及所に勤務した時に鶴窓会3代目会長の若松幸夫さんが次長として勤務して「鶴窓会をたのむよ」と言わされたことから始まります。当時、農学部には高校同級生の高橋敏能さんが勤務していました。その後農業試験場勤務では当然なことと思っていました。

県庁勤務の時に、若松幸夫さんの弟の若松正夫さんとも知り合い、県庁農業技術職員で懇親会を開催した時も「鶴窓会をよろしく」と言われたのでした。

その後農業試験場勤務では

農学部へ訪問する機会が多くなり、鶴窓会の役員となりました。

その後農業試験場勤務では

建築し、平成3年に村山支部活動を30年振りに再開したこと

で本部との関わりが多くなり、当

時の役員会では支部活動が重

要といふことで、宮城県支部、福島県支部、新潟県支部の設立を

支援しました。今後は、青森、秋田、岩手県支部の設立を願っています。

平成19年は県内在住の各学

科代表者から選出されていた幹

事を全国各支部から選出され

るよう大幅な規約改正があ

りました。背景には、パソコン通

信で全国への連絡が容易にでき

るようになったことが挙げられ、

私もパソコン通信で山形市と鶴

岡市の距離は関係なく業務を

進めることができました。代議員や幹事ともパソコン通信が可

能になつたことから、事務局員の連絡方法が手紙からパソコン通信に変わり、事務の効率化が図られました。このことが昨年から

のコロナ禍では、Zoomでの事務局会議、幹事会開催に繋がりました。今後はこのような方法

で会員同士のコミュニケーションが図れるようになれば良いと思

います。

同窓会に参加したくない理由

に、①出世できなかつた、②仕事

で失敗した、③仕事以外は興味

がない、等があるようです。参加

することによって、①知らない人

との付き合い、②旧知の知人友

人との再会、③母校との連携が

図られる、業務に活かせる、等が

あります。

現代社会では地球の裏側でも

同時に話し合うことが可能で経

済活動も可能です。しかし、人

間は直接会つて話し合うことが

大切であるし、「懇親」は直接

団らえる、業務に活かせる、等が

あります。

現代社会では地球の裏側でも</p

山形大學農學部學生研究支援事業につき

鶴窓会副会長

加茂田俊則

この時期学生諸君は卒論の取りまとめで多忙を極めていることを推察します。コ

鶴窓会では会則に農学部の發展に寄与するため「教育・研究に関する事業及び助成」を行うこととしており、修士・学士各論文作成のための調査・研究活動を支援しています。

今年度採択された3課題は、昨今問題となっている地球温暖化や気象の激変現象をとらえ、農山村に埋もれた資源の活用と循環する環境の創出に結び付けたテーマです。フィールドとする自然界の多様性を俯瞰した素晴ら

秀者は創立会会長から表彰状と図書券5千円が贈呈されました。会長賞の贈呈は学位授与式の席上、学長、農学部長表彰とともに行われ、対象者9名（修士課程専攻3名、学科6名）が表彰されました。受賞者にあつては、これを契機として更なる飛躍を遂げ人生の大きな成果にも結び付けていただければと思ひます。

## 學生研究支援事業申請課題(申請4件、採扱3件)

- ① 研究実施学生 小笠原 舞美(食料生命環境学科 水土環境科学コース)  
研究課題「**溪流における露岩化のメカニズム解明と河床環境評価**」

---

② 研究実施学生 菅原 叶恵(食料生命環境学科 安全農作物生産学コース)  
研究課題「**地域資源を活用して生産する豚肉の食味特性の解明**」

---

③ 研究実施学生 湧井 悠太(農学研究科 生物資源学専攻)  
研究課題「**水田への微生物燃料電池の設置が土壤微生物生態系に与える影響**」

## 令和2年度 鶴窓会会長賞受賞者

食料生命環境学科	安全農産物生産学コース4年	山崎 稲平	食料生命環境学科	水土環境科学コース4年	森 勲哉
食料生命環境学科	食農環境マネジメント学コース4年	丸山 七海	大学院農学研究科	生物生産学専攻2年	寺脇 昌輝
食料生命環境学科	食品・応用生命科学コース4年	菊地 爽太	大学院農学研究科	生物資源学専攻2年	小鹿 なつめ
食料生命環境学科	植物機能開発学コース4年	渡辺 陽紀	大学院農学研究科	生物環境学専攻2年	齋藤 聖馬
食料生命環境学科	森林科学コース4年	木戸 佑梨子			

私は大分県出身で、2014年に大分工業高等専門学校専攻科である機械・環境システム工学科（2007年～2012年までは本科の都市システム工学科在籍）で学びました。大分高専では、河床付着藻類を用いた河川生態系の評価手法の提案をテーマに研究をしておりました。研究活動を通じて、「見、澄んで綺麗な水であっても、目に見えない微生物や化学物質の汚染があることを知り、水の「質」が我々の生活に与える影響について興味が湧いて大学院に進みました。進学先の宮崎大学大学院

私は大分県出身で、2014年に大分工業高等専門学校専攻科である機械・環境システム工学科(2007年～2012年までは本科の都市システム工学科在籍)で学びました。大分高専では、河床付着藻類を用いた河川生態系の評価手法の提案を行った。研究活動を通じて、「見、澄んで綺麗な水であつても、目に見えない微生物や化学物質の汚染があることを知り、水の「質」が我々の生活に与える影響について興味が湧いて大学院に進みました。進学先の宮崎大学大学院で山正晃と申します。この場を借りて皆様にご挨拶申し上げます。どうぞよろしくお願ひいたします。

1976年は宮崎大学で博士(工学)の学位を取得した後、山形大学農学部のプロジェクト教員として着任し、カンボジアにおける水起因の健康被害に関する微生物汚染とそのリスク評価のプロジェクトに従事しておりました。在籍時には、タイやベトナムといった東南アジアに展開するプロジェクトに参加して、農地や食品の汚染の問題にも取り組みました。日本での研究活動とは全く異なり、現地の研究者や学生への技術指導は苦労した反面、これまで学んだ技術と経験が活かされる場であり、非常にやりがいがありました。現在でも現地の研究者とは連絡を取つており、世界的なコロナウイルスによるパンデミックが収束した際には、国際的な研究も進めていきたいと思っております。

A black and white portrait of Associate Professor Hiroaki Kojima, a young man with dark hair and a slight smile, wearing a light-colored shirt.

は他の地域を知っているからこそ、もう一方の地域の良さに気が付くという事はよくあらうかと思います。私にとって、山形県や東北地方は未知のフィールドではあります、それはむしろ環境の違いを際立つて感じる事が出来る利点とも考えております。実際、山形県をはじめとする東北地方は、地球温暖化という環境面においても、人口減少という社会面においても、世界に先駆ける知見を見出す可能性を持っていると感じております。

今後は、自身がこれまで取り組んできた保全生態学や進化生態学、生態疫学等の視点から、東北地方の強みを活かした教育・研究を進めていけたらと考えております。まだまだ半人前で大変恐縮ではあります、が、先輩先生方や地域の方々のご指



准教授 西山

西山正冕

工学研究科では、環境微生物の研究にのめり込み、修士課程と博士課程の間、一貫して水環境における薬剤耐性菌（抗菌薬の効かない細菌のこと）の研究を行つてまいりました。研究テーマが境界領域であることから、工

地で研究教育活動を行えることが非常に楽しみであると同時に、責任ある立場として日々の学生指導や研究に邁進いたします。今後ともよろしくお願ひいたします。



貢等を務  
で、外来  
物由来の  
た、人間  
わるテー  
致します。